

2022年5月1日（日）
宣 教 「信じる者になります」
聖 書：ヨハネによる福音書20章24節～29節

みなさん、おはようございます。

ツツジの花がきれいな爽やかな季節を迎えました。

それぞれのゴールデンウィークの日々が守られますようにお祈りいたします。

さて、今日の聖書の個所は、復活されたイエスさまが弟子のトマスに表れた場面です。トマスとは英語で言えば、トーマスとなります。よくある親しまれている名前です。この弟子の一人トマスは、イエスさまの名前をインドにまで伝えたという伝説もあります。その伝説が生まれた出発が今日の出来事だと思われま

す。主イエスが復活された日の夕方、ユダヤ当局に捕えられるのを恐れて、隠れ家に潜んでいた弟子たちに主イエスはご自身の姿を表されました。その時、弟子のトマスはその場にいませんでした。今日の個所の24節に「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。」とある通りです。トマスはディディモとも呼ばれ、その意味は双子ということです。

そこで他の弟子たちがトマスに「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」ときっぱりと答えたのでした。トマスの性格でしょうか。どこかわたしたち現代人に似ているようにも思えるのです。実証主義者とも言われ、確かな事実、証拠をよりどころとする人物だったようです。

トマスは肉眼の目で見て、手で触って確かめて見なければ信じないのです。「釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、」と。

更に「この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」とまで言ったのです。彼は徹底的に自分を信じる、自分の目で見ること、見たこと、自分の手で触るという自分の感覚で確かめなければ本当だと納得できないのです。

トマスがここで「信じない。」と頑固なほどに拘っている理由には、思い巡らしますと、イエスが弟子たちの所に来た時、自分はいなかった、それも自分だけがいなかったということも彼の心に影響を与えていたのかもしれないと思われ

トマスが「イエスは自分だけがいなかった時にやって来られた。なぜなのか？」と思うこともありえることではないでしょうか。共にいない。自分だけが外されることの悲しみや悔しさはわたしたち人間共通の思いではないでしょうか。

親の愛を感じることにどこか似ているように思います。複数のこどもたちの中で育った人は、一度は親の愛情の注ぎ方が自分だけ他の兄弟姉妹より少ないとひがんだ経験はあるのではないのでしょうか。やはり子どもの時に親の愛情を感じた人はそれだけで幸せだと思います。ひがみや妬みは、人の心を意固地にさせ信じにくくさせる力にもなります。トマスはわたしたちにいろんなことを考えさせてくれる人だと思えるのです。

さて、ここからです。

26: さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。

戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、

「あなたがたに平和があるように」と言われた、とあります。

復活のイエスは、最初に表れた1週間後に再び弟子たちの居る場所に姿を表されました。

この時は「トマスも一緒にいた。」とあります。わたしは、今回ここを呼んでだ時、「良かったな〜。」と素直に思いました。イエスは弟子全員を思い、愛しておられますが、この時はイエスはトマスに会いに来られたのだとさえ思ったのです。

トマス一人に合いに来られたイエス。神さまの愛は、時に偏愛、片寄った愛のようにも思えます。

ある人だけを、かたよって愛されるのです。もちろん愛なる神さまは、わたしたちすべての人を気にかけて、心配して愛しておられるのですが、

状況によっては、一人だけの人を愛しておられるように見えるのです。

見えてしまうのです。神さまの愛は常識的な愛ではない。今、この時、

心や身体の病んでいる、また苦しい状況の中にいる、一人のあなた、一人のわたしに目を留め、心を注ぎ慈しんで愛してくださるのです。

先ほども語りましたが復活のイエスは、2週続けて弟子たちの所に復活の姿を表されたのです。このことは、後のイエスを信じる群れである教会が、一週間ごとに集まって神さまに祈りを捧げる礼拝することになったことの根拠となったようにも思えるのです。今日、世界のキリスト教会では日曜日ごとに形や時間は異なっても集まって礼拝を捧げています。集まる人数は様々です。しかし、イエスの名によって2、3人集まる所に主イエスは必ず居てくださる

のです。マタイによる福音書 18 章 20 節にイエスご自身のことばで「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」とあるとおりです。教会は礼拝人数が少なくなってもなくなる、閉じるということはめったにないと思います。この点は、会社やお店とは異なっていると思えます。

礼拝の時は復活のイエスにまみえる時であり空間なのです。肉眼の目ではなく、心の目、霊の目、体全体を目としてイエスを見る感じることのできる時なのです。それを毎週続けて、この世の生活で弱ったところに神の霊の力を与えられ、昔の賛美歌にあるように、「あまつましみず ながれきて」、それを受けて、新しくされ 1 週間を歩み出せるのです。

さて、

イエスとトマスとの出会いに目を留めたのです。これは、わたしたち一人一人とイエスさまとの出会いでもあると受けとめたいのです。

27:それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

イエスさまはトマスが、言っておられた通りのことをしてくださったのです。イエスさまは、トマスの気持ちに合わせて事を行われたのです。

ある聖書訳によれば、この個所の「あなたの指をここに当てて、」の「当てる」という言葉は、「ここに出して、私の手を見て見なさい。」と訳されており、また他の聖書の訳では「ここに持って来て、わたしの釘の跡をよくみてごらん。」と訳されています。

わたしは、宣教・メッセージの準備の時、複数の日本語訳聖書を読むのですが、「ここに出して、私の手を見て見なさい。」とか「ここに持って来て、わたしの釘の跡をよくみてごらん。」とかの訳を、最初手の動作がぎこちないように、訳がきれいではないようにも思えたのですが、しかし、その分、トマスが実際、自分の手を動かしているように現実味があるように思えて来たのです。

イエスの十字架で受けた釘の跡に手を当てるには、

自分の手を動かして傷口まで持って行くことが必要だということです。

また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。あなたの手を持って行って、わたしの脇腹に入れなさいとの主イエスの言葉は、トマスの迫る主イエスの迫り気迫さえ感じます。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」との主イエスの言葉に打たれたのだと思うのです。

トマスは、手でイエスの傷を触れたかどうかは分かりませんが、

トマスはイエスの傷跡を見て、自分の手で自分自身をイエスに近づける中で、

確かにイエスさまの愛を体験する者、信じる者へと変えられたのです。

トマスは突然、天啓、天からの光を受けたかのように告白しました。

「28:トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

傷に触れることはできなかった、もはや触れる必要もなかったのだと思います。むしろ、トマスは己の罪と主イエスの愛を深く深く感じだと思えます。

トマスはそれまでのトマスでは考えることのできなかった「信じる者になります」というトマスに変えられたのです。ここに、新しく生まれる、新生、新しく生きるということが起こったのです。

29:イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見な

いのに信じる人は、幸いである。」とイエスは言われました。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」このイエスの言葉は、今日を生きるわたしたちへの勧めと励ましの言葉でもあります。

愛なる神さまは、わたしたちは、直接的に肉眼でイエスさまを見なくても、こうして共に礼拝を捧げる中で、聖書の言葉を聞く中で、祈り賛美する中で、困難に遭い、苦しみの中にある人たちを思いやり、見舞う中で、互いに大切にし合う生活の中で繰り返し復活されたイエスさまに出会えるようにしてくださっているのです。そのイエスとの出会いの体験は、あのルカによる福音書に復活のイエスに出会った二人の若者が「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではない。」という出来事を思い出させてくれる体験に似ているのです。

トマスは、復活のイエスに出会ったのです。そこから立ち上がって、今度はイエスの名を伝えるために歩み出したのです。

わたしたちも復活されたイエスさまと共に歩み出すという思い、「信じる者になります。」という気持ちを持って生きて行きたいと願います。

主の平安を祈ります。